

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



現

十二日

本朝天子傳 上

教訓序為永來為著



歌

川

貞

重

畫



本朝百孝子傳

三冊

東都書肆文溪堂



本朝百孝子傳初編

孝子傳初編

貞節を以て主意の

つゝ大なる孝子貞女の忠公

世ふとて孝子貞女の忠公

小解やうな金言良業れ

苦いものなり



忠義の神霊を祀る
 傳を例の仁徳の文を
 婦女子の為ふ思ふを
 教訓名人孝女誌



仁君孝子に
賞と賜ふ



芝木村
甚助

梅のむ
さうり
あまのうそ

甚助が兄
面目でしるふ



古代事歌
孝女が死ね
送らば

官使の件で
あはれは

ふんがらぬ
親をねむい

橘の
逸勢の
處女

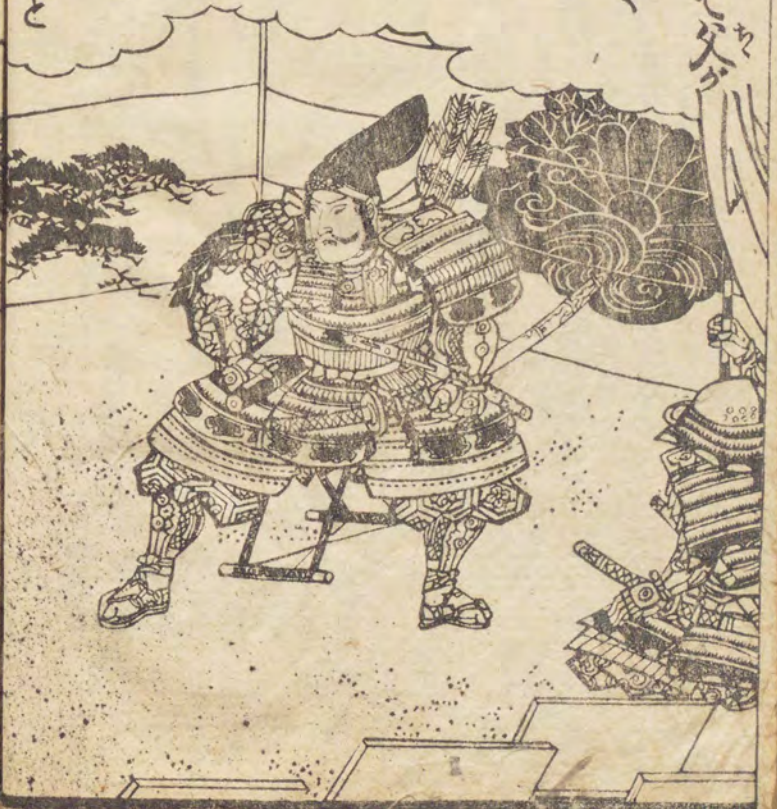
後に
妙沖
屋



楠帶刀正行

楠正行は河内の延尉正成の長子なり建武二年夏五月を以て
自ら西國の兵數十多誘を引率て責撃し既而檣洲の軍
と迫り此時南帝は新田元中將義貞とあて使討賊又楠正
成を加勢とて元中おと援戦よと勅命せらるる成る此
度の戦ひ悉くも利ありと知るはと知つて元中おと死を決定し
小軍を率ける櫻井の驛より其子正行と名けて云々
我聞夫獅子の児を生てよりつる二日能学其父といふゆゑ今
年十二才に我今云所を能く忘るべからば我若死する
ものなり天下に忽ち小尊成の有とるべし其時よりして

必しも彼を陥りと父が
 忠心に世を空しく
 するところれは
 力の及んば
 君の御為ふ
 忠義とて
 節を守りて
 討死せよ然も
 わる我に對して
 何もの大義と



教訓の漢を
 別名を故
 郷（郷らめ其
 遠同月の未だ
 五月会庫の時ふ
 戦殺を敵とて
 とも正成の忠烈
 義勝を惜しみて
 名とありぬ人もは
 こそとふる氏も之を憐れ



其首を河内ある楠が家へ送るけれ正成の室家へさへ
の怒りえさる一箇とい通て既不自害せんとあをを
公賢と初とめて歎たのゆゑ死せんとあ心似て不孝
そもく父上の様升より放逐しゆゑい何の爲とあ
軍の見限あるゆゑ其身陣歿あると楠朝庭へ忠勤を
と心其方の身と残し措きゆゑの事を唯悲し命を
捨て父上の悦びゆゑ一日もあや成長し賊臣と討
て誓と華君命をたてまつると父上の志を兼つぎ
ゆるきなりといふべし必しも恨めなく身を捨て
後とも無理と書せし教訓ふうてい行い実たといはれ

よりして君父の爲に仇と討んとをせしめ馬の綱練
軍学の業一日も怠る人成人の後右野へ入り帝を守
まのせし正成の亡後楠朝庭に楠ありと敵い恐れ
殊に頼母とを思ひけるゆゑ正行と父とを越えより
忠烈軍界君后と感服せしむ或時吉野の皇居へそ
づつ俱てあつたる園りある楠朝第一の美女と稱
辨の内侍を尊氏の執事より武蔵守師直が好色の
梅々技といふ女と四として騙し出し奪ひ去んと
いふ早くも視る怪しき足と答て其偽を師直の
辨の内侍を守護し吉野へ入り其首と具に美園あり

ハ帝敬感あらせられて即内侍を出行賜らんとありける時

忽ち角ふあがらるる處くもあつぬ身

かりの勢り成りてあつた

といふ一頁をよみて内侍を辭し歸する見識實に正成の子

るりけを然る行住座臥ともふ死を忘るの違ひ君の爲に大敵

と討破り功とあるの賞賚をまうた唯いさぎよく死した

尸をきいて忠孝と全せんとのことひ極て在りあを察せら

其の多ふことを家初僅に累代の郎從五百餘騎の小勢を以て

住吉天王寺に陣を敷て乙川顯氏の二千餘騎を討て大勝

せる氏を恐れしむ是より後山名伊豆守時氏の六千餘騎を

又住吉に打破する氏の空虛を責て既ふその首を得んとま

つる迄に勝利を全せしむるも氏の垣固を潜り這やて逃去

は辛く命を脱ぎぬさるるも尊氏の妻室に乱軍の中を殺さ

まてり嗚呼正成が軍法の烈しきや開か父やもまらぬべし

あるて天下の衆人南朝を輕ん其且先人正成の忠心美名いづく

高く又正成が孝の名を稱する者もその日の終るもその氏の日夜

只正成を恐れ足と拒退入る八萬餘騎の大軍を發し既

北京を擧出を此時正成の僅に千餘人を以て四條繩をまき氏

の大軍に向ひて兵勢をまき北軍の先陣を十方に散散し猶も

勵を進むる人るは境いづく如く二陣の武田伊豆守が七百餘

楠正行
 三千騎の
 小勢を以
 師直が八
 萬餘騎の
 大軍と
 討破る



誘ふ大半討取陣乙川阿波將監清氏の五百船誘四陣の仁木
右京大夫親章が七百船誘五番備へ千葉宇都宮三千
船誘六番乙川瀨は頼春が七千船誘各々勇とあるて戦
へとも一行が軍兵少一めた西の猛虎の群羊を如く北
軍ことごとく討破られ周章まゐる八幡ともよんで都人北の教師
直の惣軍の司も氏の名代りける既に必死の危に及びし
数回この故上山六郎と幼く高播磨守守左右勇士
只一時小五十餘人一行が隊討合れぬれども南朝の運
氣已に衰へ北朝の運の天の時るく以て仍か力に不及
ゆゑ此戦場は死と急死を候はれ北敵を討破りて乱軍の中
弟の正時ときちて死にたりける其年ワづふ二十五年子時

維南朝の正平四年の春正月朔五日のりき

將是忠孝の名士と賞賚さる一猶その理論の委
きうの本朝孝子傳太平記にもあるあり

橘逸勢がゆ

むく永和年中のりきや伴健岑といふ人謀逆の時橘
逸勢も一味りとの疑ひを蒙り伊豆國に配流せらる
其娘何某の幼少時より孝心深く眞実々々仕へる
因父の死失の罪をかづらひを蒙り悲し涙みられてのり
けふ今日るん父を伊豆の配所へ送り出さるるをばて前後を

送れ江州の町を走り出その体をうかひてやがて父の案
られず牢獄にまゐりて其の情を述べしに父は
見外せしめりありて追拂ふ其杖より父を命ぜりある親
あつて配所へ入んと願ふ尚罪は重なりて所為をうき父
の病ありて旅の前路の覺束るくおし死のき多かれは
せめんと怒りといひあつても止むれぬ身なりと言ふの
候ふ行向の供となりて父が配所の艱難をなほけり艱
るに奴家へいさめしをけり父と碑より慰めし下りて
と一向かきに説かれ流石なる事とて官人達も同役する輩
と商量し公卿を恐怖するも又更なる孝子の情願の捨て

かゝ配所へあつていひつゝも漸くけり娘の旅の宿り
み父と慰めしに官人達も旅仕へ身と縁を断りて
りど力られ人とも皆共侶なる孝心と感し憐れ初められ
比でも却て足とするべき伴ひ且もふむ惜せし親子のま
情と盡させけりいさめしに父の逸勢に伊豆國までも下りて
遠江國の板橋の驛の旅宿に病臥て竟に果敢多るけ
し娘の歎きし方ありて送るの人とも亦俱に涙あり
れと詮方あるれば此驛を夜のそとをて行かせ都へ帰
登る娘のあふけりつ尼とありて妙沖と唱へ父の墓所を
つて其の前より草屋をあらはし香華の日向をたてて

他事よりいふがふ
 往還旅客もその
 志を感嘆し開け
 囀のそせやふ
 自然都へも
 他へをそそぐ
 嘉祥三年の
 夏五月
 詔を下し
 逸勢



正五位下
 遷贈せらる
 且免れて那の
 地み改葬の
 御沙汰あり
 その料多く
 賜りけること
 併妙仲尼の
 孝心あつて
 敵感のあま



不測の御仁恵ありとあるされ妙沖の天地と神朝恩と謝
する就て又不幸の父がわづらうて斯る慈愛ふあひざるを
るや本意なりとせむひける

そもく妙沖の人とあり外系順ゆく内健を男子
も容易ゆゑに女の方之邊とを離れ伊豆
の配所へ赴んとする志実ふ大妻と云つて極と温和
るゝまの猛々武士の妻を借し罪人の子と免して
俱ふあふせゆゑあり鳴呼孝の徳大いなるわが
再言この妙沖が亡父の墳墓を守りて遠くありて既ふ
あて十餘年悠ておふ登りし後まゝく行ひしとを

○農民甚助

むく承応年中一人稀代の孝子あり備中國浅口郡余木村
るる百姓也其甚助といふありける其父在世時所給の田地を
あつて二人の子ありて二個の兄弟兄弟の份をとりてよく取
せ甚助の末子ありて寡く母のて各家を造りて二
軒別居に住み父死して後其母二個の兄の方を嫌ひ末子甚助
が許小居て病むる故あるる二個の兄は放蕩やて父おろし其
助の老実ふて元來父母は孝心深く今母を事ふふ至り朝夕力加
つて終は其妻も亦姑と大にふさふさ一方る世間の嫌
鑑うと近隣のめふ不登られり既ふ其母の齡八十餘歳ふ及べ

とも漸五十七八の如く若く健ふと云ふ人々足小戯れて同
等老母の次子小前年へのと衆と云うると知れり去年よ
う今年も猶若やだて日暮ハと笑ハ彼母を合てのやう我身の
老ても弱くア面ハ怪小公の安穩ハ朝夕樂一ければその
樂一ハ外するも瘦見甚助夫婦のものが奴家と云ふもの
いふ不足と云ふものた云ハ貴人の母君へも此身程自由えて
樂きとの所座トと平生人ハ自ら中安ハ老と云ふ事
と知るまのさハ中不覺ハ顔もさアつれざるもの云と云
一と云ハ時王助が考順る其徳妻ハ及ハ又姑小信切ると母
一言で密書する亦只この母のさハ甚助二個の兄と知れ又

実と云ハ村中れ今を孝悌を感下座する日と云ふり云ハ
の兄ハ小前年其公邪小ハ行状ハ毎日比耕作の要も云ふ
ま田畑年々荒れて登らば殊ハ風水の難ハあつて困窮と云
る數度より夫ハ異りて甚助ハ父より田畑を譲れて以来一
年不代のさハ村中水損の年と云ふ助ハ田のさハ云ふ常
より却て豊作なれば是全く孝心の徳なりと云傳ふと云
毎小獲立一ハ二個の兄ハ妬を憎と堪と云ハやハけん或時
許ハ乃ハ助ハ向いて我父ハ親と云ハ依怙見及る仕方
云其方ハより田畑を譲り我々ハより所を擇ハ擇て云
由例ハ未進と云ハ難民セリ依之當年より其方の田地と云

